陽の光とともに

全国世界を
駆け巡り
流れたのは汗と涙

お日様は一つだけど
光はイロイロ
さんさん
じりじり

涙の雨のあとは
虹がきらきら
希望を運ぶ

蠢(うごめ)くいのちが育まれ
活動の輪を大きく大きく
広げてこられました

2016.10-2017.9 Live on Annual report　太陽の巻

リヴオンしんぶん

https://www.live-on.me/

対談

2016〜2017 振返り

理事の上田假奈代が、尾角と水口にこの一年を振り返ってのインタビューを行いました！

上田：まずはてるみんがイギリスに旅立つ前のお気持ちについて、どんなだったですか？

水口：「いってらしゃい！」と快く送り出したい、応援する気持ち。と、とは言え代表が日本にいなくてどうなっていくの…という不安の気持ちとありましたよね。

尾角：組織の成長は代表の不在が最大のチャンスだと言うことを、長年お世話になっているFTC.の鈴木敦子さんから聞いていたけれど、やはり不安はあった。組織の力が小さくなり、活動が届けるべき人に届けられなくなっていくのかと。でも、例えば遺児支援事業である京都のつどいばについては、休止になるかと思っていたけれど、陽子さんが引き継ぐよといってくれて、心強かったです。

きれいな色の飴玉のような人たちがやってきた

上田：事務局のかおりさんも来てくれたりとかよこさんも来てくれたりとか、きれいな色の飴玉のような人たちがやってきたなと思って。代表不在の団体運営に至る準備がこのタイミングでしょという形でやってきたのだと思うんですよね。

尾角：そこに至る準備は入念にしました。例えば国際フェローの先輩でカナダに行かれている方の旦那さんがNPOを経営されていて（ブラインドサッカー協会の松崎英吾氏）。遠隔での仕事の工夫をかなりされていたので、私とよこさんとかおりさんで事務所まで伺いました。オンラインミーティングの各種ツールや、リスク対策まで聞かせていただきました。

水口：イギリスでつなげるなら、と他の地域ともオンラインでつながることが多かった一年でもありました。リヴオンで学び、グリーフケアの活動をしている名古屋や北海道のメンバーと。

尾角：PCが苦手だった人達さえもオンラインでつながり、リヴオンの想いも活動も広がる。グリーフケアは全国で必要なものだから、各地にいる仲間と共に活動をやっているというのがありがたいです。

尾角：この一年は、これまでリヴオンの活動を長く見てきた人達が真価を問うてくれていた感じがするんですよね。だからこそ、支援者の数もぐっと増えたんですよね。一度ご寄付くださった方がohanaメンバー（継続支援者）になってくださったり。「これなら本気で応援するよ」という応援の風もイギリスには届いていたので、たゆまなくイギリスから御礼のはがきを書いていました。

仲間はめっちゃ欲しています

上田：これからのリヴオンの組織を大きくしていくこととかについては。

水口：今回のてるみん渡英に限らず、仲間は常に、めっちゃ欲しています。各事業を担ってくれる人はそれぞれいるけれど、リヴオン本体のところで団体をどうしていくか一緒に考えたり、動いたりしてくれる人はごくごく少数だなって。でも仲間を迎え入れるためには経済的な基盤も必要で、ちゃんと循環していく資金の流れをつくらないといけない。それは応援者を増やすというところとも重なるところだなと思っています。応援者が増えることで資金が巡るようになってくると、次の人を迎え入れるための土台ができるということだから。

尾角：英国はNPO、さらにNPOの連携団体、研究者、当事者がつながりながら社会づくりをしているのを目の当たりにしました。日本では、一つの分野として、グリーフケアがより豊かに、持続的に発展していけるかどうかがこれから大事なテーマだと思ってます。リヴオン一組織を大きくすることよりも、この分野全体としてどうやってみんなで力を合わせて国レベルであったり、地域レベルでグリーフケアを広めていけるのかを大切にしたいなというのが、私が持ち帰ってきたお土産でした。

上田：業界として資格を作る動きも今は増えてますよね。

尾角：増えてますね。ただ資格制度は持ってる人しかグリーフケアができないように見えてしまう。でも私達の目指しているのはお坊さんにはお坊さんの、お花屋さんにはお花屋さんの、学校の先生には学校の先生の担えるそれぞれのグリーフサポートがあることを広めていくことなので、資格制度づくりは今のところしないかなと思いますよね。

上田：リヴオンしんぶんを読んでる人達に伝えたいことはありますか？

水口：シンプルに、いつも見守って応援してくれてありがとうございますという気持ちです。本当に見守ってくれてる人がいるから、リヴオンが生き続けていると思うし、「報告できることをしたい！」と活動できるので。これからも応援していただけたら嬉しいですし、何か一緒に出来ることがあれば一緒にやりたいなぁと。

尾角：修士課程の卒業式の時に涙が出てしょうがなかったんですね。「親御さんは来てないの？」と友人のお父さんに聞かれ、保護者席を見て「あぁいないんだ」と。でも自分には待っててくれる仲間や出会ってきた遺族や遺児たちや、応援してくれるみなさんがいることを想い続けて修了することができました。寂しさは15年経てもかわらないけれど、待っててくれる人の想いにこれからも応答していきたいです。

リヴオンの応援団

リヴオンの支援者のお顔とお声をお届けします。八王子の講演でご縁をいただいたご遺族でohanaメンバーでもある半田康子さん、北海道の連続講座の世話人でもありohanaメンバーの内平淳一さん、いのちの学校@名古屋の裏方を支えてくれた伊藤妙さんです。

半田 康子 ohanaメンバー

私は息子を自死で亡くしました。暫くは日常の全てが止まり、家にこもって同じ経験をした方のブログを読み、自分もブログに吐き出すだけの日々でした。その時間はグリーフの存在やリヴオンに辿り着くために必要ではありましたが。その長く真っ暗な時間を経たからこそ今一番思うのはそういう情報にネットでやっとたどり着くのではなく、もっと身近に手渡しで必要な人に届く様になるといいなという事です。そのための活動を続けているリヴオンをずっと応援していきたいです。

内平 淳一 浄土真宗本願寺派 覚土寺副住職

2年前、「僧侶のためのグリーフケア連続講座－in北海道」を受講したのが、リヴオンとの出会い。以来、多くの学びとたくさんのつながりをもらっています。人は大切な人やものを失ったとき、喪失感や孤独感に苛まれますが、一方で悲しみ（グリーフ）を共にしたときに人は他者との深いつながりを得られるのかもしれません。その一筋の光となる糸を紡ぐのがリヴオンの活動なのだと思います。これからもリヴオンと共に。

伊藤 妙 いのちの学校名古屋 運営メンバー

ご縁をいただき名古屋の運営メンバーとして関わりました。「みんなが先生、みんなが生徒」として学びあう場。ありのままの自分を、そしてお互いを、大切な存在として尊重し合う気持ちが自然に沸き起こり、グリーフと共に在ることをそのままにあたたかく包み込んでくれていました。一人でも多くのひとが、自らの「ままに」安心できる社会になることを願って、これからもリヴオンの活動を応援したいと思っています。

Major Headlines

振りかえると「仲間とつながる・仲間と共に」という言葉に尽きる1年でした。

2017 7月

2016年10月~2017年9月の主なニュース

僧侶×地域のグリーフケア@北海道

＜僧侶のためのグリーフケア連続講座＞（以後：僧侶連続講座）の北海道修了生が地元の団体とつながり、グリーフケアを継続的に学び活動するコミュニティを作り上げました。リヴオンでの学びも更新していきたいと定期的に勉強会を企画してくださっています。

講座を超えたつながり@名古屋

僧侶連続講座名古屋・東京と＜ファシリテーター養成講座＞（以後：FT講座）の修了生が繋がり、チームを作って、くいのちの学校in名古屋＞を運営していきました。そしていのちの学校の参加者同士でも、新たなチームが生まれつつあります。

学びを活かした新たな動き

FT講座の修了生の中から、お寺で開催するグリーフケアのつどいや、障がい児とその家族がつどえる「くつろぎば」、入棺体験ワークショップなど、リヴオンでの学びを活かしながら場をつくり、必要とする人たちに届けていく動きも拡がっています。

2500人に「いのちの授業」@鴻巣

埼玉県鴻巣市と協働し〈いのちの授業〉を市内19校、小・中学校で実施。小学4年生から中学3年生の生徒と、保護者や先生含めた2,500人以上に「死に学ぶいのち」というテーマで、グリーフと自殺予防、セルフケアの学びをお届けしてきました。

懐かしい仲間と共に@大阪

＜子ども・若者のグリーフケアプログラムを学ぶ連続講座＞をリヴオンが生まれた関西で、以前の仲間と共に開催しました。2011年に石巻で尾角と共にいのちの学校を生み出した大切な仲間、宮原俊也さんを講師にお招きし、再び企画を共にすることができました。

新・京都つどいばチーム☆

大阪での講座をきっかけに＜大切な人を亡くした若者のつどいば@京都＞をこれから一緒に運営するチームも生まれました。実りを迎えた後の種たちが、日の光と水と栄養を受け取って、新たな地で芽吹きつつあることを嬉しく感じています。

リヴオンを巡る人たち

リヴオンは団体設立した2009年以来、高校生ボランティア、デザイナー、お坊さん、お花屋さん、弁護士、経営者…と年齢も職業も様々な仲間と共にリヴオンの植えた種、1つ1つの事業を育んでいます。土であり、水であり、陽の光であり。リヴオンにとってなくてはならない存在です。

代表

尾角 光美
創立者・代表理事。2009年にリヴオンを立ち上げ現在に至る。

理事

川崎 政宏
弁護士・認定NPO法人おかやま犯罪被害者サポートファミリーズ代表。

上田 假奈代
詩人・NPO法人こえとことばとこころの部屋代表。「釜ヶ崎芸術大学」創設者。

岡村 充泰
㈱ウエダ本社 代表取締役
新たな価値創造を目指す「京都流議定書」主宰。

鴨崎 貴泰
組織基盤を整えるのに重要なファンドレイジング担当理事を務める。

水口 陽子
リヴオンでは講座開催やファシリテーター養成等、学びの場づくりに携わる。

監事

長谷川 ロアン
ニュージーランド勅許会計士。リヴオン前身「101年目の母の日」寄付者第一号！

パートナー

本間 康弘
顧問税理士でリヴオンの会計を丁寧に月次監査してくださっている。

坂上 彰啓
リヴオンのロゴに始まりチラシや名刺等、表現を裏方で支えるデザイナー。

スタッフ

但馬 香里
2016年6月入局。以前はウェディングのカメラマンとしても活動をしていた。

インターン

飯田 茉彩（まや）
大学院生。20歳のとき癌の母親を在宅看取りし、グリーフの概念に出会う。

リヴオン しんぶん

事業の観察記

リヴオンの行っている事業を参加者の声をもとに特集しました！

いのちの授業

鴻巣市との協働から国のモデル事業「SOSの出し方教育」

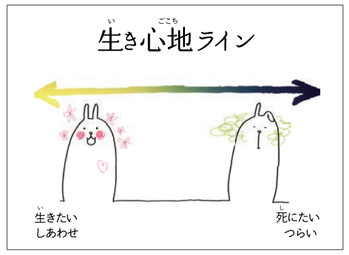
平成29年に自殺総合対策大綱が改定され「子ども・若者の自殺対策を更に推進する」ために「SOSの出し方に関する教育の推進」が重点施策として掲げられています。国が全国の市町村に策定を義務づけた「自殺対策計画」を巡り、厚生労働省が本年度選定した計画策定事業モデル市町村（全国14カ所）の一つに鴻巣市が選ばれ、これまでリヴオンと協働して実施してきた「いのちの授業」を「SOSの出し方教育」のモデル事業としました。今回はリヴオンの「いのちの授業」のパートナーである鴻巣市健康づくり課の保健師さんたちに想いを聞かせていただくインタビューを行いました。

協働からモデル事業へ

中山：最初は、平成25年度に自殺対策講演会ではじめて尾角さんのお話を聞いたんですけども、その時に「来年度にいのちの授業やりたいんです！」と控室でご相談して、その時「いいですよ」って言ってくれたんです。そこから当時、健康づくり課に教育委員会に所属したことのある職員が何人かいたんですね。やるにあたっても、やっぱりまず学校現場の校長先生がいいよって言ってくれることがすごく大事なので、そのつながりを活かせるという土壌はあったと思います。27年度に2校、28年度に4校と実現できました。なぜ広げようと思ったかというと、伝えたいことが非常にストーリーとして完成度が高いので、シンプルに子どもにも伝わるし、これ、伝わっているって一緒にいるとわかるんですよね。自分は、普段死について考えたことなかったけど、今日話を聞いてはじめて考えた。その時に、みんな身近な失った体験についても書いていて、例えばおばあちゃんが亡くなってあの時、悲しかったけれど、この悲しい気持ちは否定したり、間違ってるんじゃないんだな。グリーフの気持ちというのを過去の体験と照らし合わせて意味づけられている。校長先生たちからも「この講座をやれてよかった」という声が伝わってきたので、これはいろんな学校でやりたいなと思いました。モデル事業の中で、メニューから選択がいくつができるのですけど、自分たちがもう着手してきていたことで、これを広げたいというものだったので「SOSの出し方教育」を選びました。

すごく納得できる教材

清水：大事だなと思ったのは「セルフケア」。私もなかなか人に助けてって言えない。けれど、先生のお話を何回か聞いているうちに出してもいいんだというのをちょっとずつわかってきたというか、そういうのが本当に大事だなと実感はしているんですけれども。「生き心地ライン」を見えるところに貼っていて、やっぱり結構揺れ動いている自分もいる。



「日曜の夜どうだった？」「今度の誕生日は？」と尋ねます

日々、自分の気持ちを確かめるというのも、先生のお話を聞いてから、今、自分がどの辺にいるのかを振りかえる機会が多くなりました。生き心地ラインが右の方にいっちゃうときもあるけれど、左に戻ってくることもあって。すごく納得できる教材。

広めていくために大事なこと

中山：自殺対策を中心に考えてみると、あらゆる事業が関連づけられるけれど、今まではそのつながりが見えてこなかった。鴻巣市の場合は働き世代の方の自殺が多く、その世代に何をすれば自殺が減るのか、国も出せていない。鴻巣市では産業振興課というところがあり、そこが実は労働者向けの事業をやっていたと回ってみて初めてわかった。何回か通うと向こうもその気になってくれたりして…。だから、例えば「SOSの出し方教育」という切り口で学校支援課に話に言ったり、今度見に来てくださいとか、そこの部署の人がその気になってくれるような段取りとかが必要なのではないか。気持ちが変わってくれると、自分のこととして考えてくれるかもしれない。まずは当事者の気持ちが変わると、行動が変わってくるので、こういうことができるんじゃないのって力を貸してくれたりとか。キャッチボールがはじまることが大事。ずっと思い続け、話をすること。

小学生・中学生の声

●人は朝、出かける時、死ぬ寸前の時、元気だったとしても、いつ、事故にあったり、病気になったりするのかわからないので、一日、一日を大事に生きていかないとと感じました。

●身近な人を亡くす経験があり、後悔したけれど、それが自分だけではない。正常な「心」の反応なんだなと気づきすこしほっとした。私は相談することが苦手なのですが、今回でしっかり相談してみようと思ったし、私が相談するのが苦手なので、困った人がいたら、声をかけてあげたいと思います。

●お話を聞いて、自分の感情次第でから体にも影響がでることもわかりました。私は音楽を聞くことやペットと遊ぶことがリラックスできることなので、辛いことがあった時はためこみすぎないようにしたいです。

先生の声

●弱さを出せる環境をつくるためには教員や家族も強さだけではなく弱さや失敗談（経験）が出せたり言えたりする環境を醸成していく必要があると思う。苦しさや弱さ、失敗が常に容認されている環境も考えていきたいと思った。

インタビューに答えてくださった鴻巣市の保健師さんたち
左から中山さん・清水さん・荻原さん・飯野さん

子ども・若者のグリーフケアプログラムを学ぶin大阪

マイ大阪ガス Social Design+ 助成企画

2017年4月から6月にかけて開催された3回連続講座を修了し、つどいばのファシリテーターになってくれた2人、柳川由布子さんと神野あゆみさんにお話を聞いてみました。聞き手は水口陽子です。

参加しようと思った理由は？

柳川：わたし自身すごく生きづらさを抱えて生きてきて、こういう想いをしてる他の人に何か出来たらなと昔から思っていて、「若者・こども」というキーワードがピタッとハマった。特有性がある。やってる人が同世代ということで親近感が湧いたのも、すごく大きかったかなと。

神野：グリーフについて知ったのは、アルコール等依存症の支援団体アスクの水澤都加佐さんが援助職のグリーフワークを取り上げていたことがきっかけ。若者のつどいばなどリヴオンの場に何度か参加してみて、もう1歩踏みだそうと今回申し込んだ。

実際に受講してみての印象は？

柳川：初めて会場に入ってみての印象は、スタッフの温かさと自然な感じに親しみやすさを感じた。講師の宮原さんが講義中でもその場で質問とかやりとりをするので、受け身で聞くより当事者性を感じた。講師・受講者といった分け目がなく、「みんなでつくっていこう」と一緒に考えていくフラットな関係に驚いた。

神野：今までは つどいばも年越いのちの村でも一参加者だったんだけど、今回は学びの場だったこともあって、違う感覚だった。居心地の良さを感じる素の私と、踏み込みすぎないように距離を置く援助職の私との間で揺らいだけど、新しい自分が生まれそうな感じだった。講座自体は勉強勉強な感じがしない配慮とか、リラックスする雰囲気を感じた。

他の参加者との出会いについて

神野：こんなに学ぶ人がいるんだということにびっくり。5～6人ごとに座るグループ形式の座席だからか、自然と話がはじまっていた。一緒にご飯食べましょうかとか。緊張しやすい私が感じるくらいだから、相当自然な感じだったんだろうな。私自身も穏やかで、安心して参加出来たというか。

柳川：つながりを感じたかな。大切にしているものが同じで、同じような経験をした人にも出会えたのでピアサポートでもあった。講座という名だけど、「自分も大事、相手も大事と、グリーフをすごく大事にしている人達なんだな」と、それぞれを大事に感じられた。共にありながら、人としての温かさを感じる時間だった。相互作用も感じた。ちょっとした一言や間、空気感でお互いの心の扉が開いたりとか。「そうそう、そうだよね」というのが広がっていって、自分の気持ちとかを「ここでは何を言ってもいいんだ」と自然体でいられた。

これから先、どうしていきたい？

柳川：必要な人に届けたい。私自身が母と死別してから22年間誰にも言えない想いを抱えてきたから。届けることで温かなまなざしを広げたい。グリーフは誰にでも起こりうることだから、身近なものになるように。

神野：つどいばとかリヴオンの場に参加して、心にあるしこりがなくなるわけじゃないけど、重さや形が変わっていった。他の同世代の人には出来ない経験をしてきて、リヴオンにも色んな形で参加させてもらって今があるから、その自分自身の経験を生かしていきたいと思っている。

子ども・若者のグリーフケアプログラムを学ぶin大阪の風景

神野 あゆみさん
7歳の時に母をがんで亡くして、リヴオンのつどいばや年越いのちの村に参加。愛知県断酒連合会が母体の福祉施設で精神保健福祉士として働いている。

柳川 由布子（やながわゆうこ）さん
8歳の時にがんで母と死別してから22年を経て、グリーフケアの活動に出会う。地域と医療とグリーフを繋げられたらと、在宅で看護士としても働いている。

てるみん渡英記 第一弾

「グリーフケアが当たり前にある社会」を求めて

何を目的に渡英したのか？

「イギリスは社会政策としてグリーフケアが広まっている」と聞き、世界中の官僚たちも学びにくるヨーク大学の大学院、国際比較社会政策学コースに進学しました。イギリスがグリーフケアをどう発展させてきたのか。鍵となった個人や団体、政策はどんなものがあったのか、課題はどんなことがあったのかを突き止めたい一心でした。ただ「グリーフケア」と言っても亡くした原因や続柄によって研究の海はあまりに広大だったので、修士の研究テーマを絞り「日英の自死遺族へのグリーフサポートの発展と課題」としました。

どんなところで暮らして勉強してたの？

ヨークという古代ローマ時代の遺跡や、中世の城壁に囲まれた歴史都市に暮らしていました。場所としては東京ー仙台のようなイメージで、ロンドンーヨーク、東北地方です。家の近くにはウーズ川という大きなが流れていてさしずめ京都の鴨川といったところでしょうか。毎年近く洪水するのは違いますね（笑）

日本の生活と変わったことは、出張で日々旅のように暮らしていたところから、毎日同じ風景を見ながら暮らしを重ねていけるようになったことです。通学路で通るミレニアム・ブリッジという橋から定点観測を撮り（下部写真）、季節が刻一刻と変化していくのを感じられることが幸せでした。大学は人間よりも鳥がえらい!? University of York は別名University of Duckと呼ばれるほどに鴨やいろんな鳥たちがいる自然豊かなキャンパスでした。

イギリスと日本の生活の違いは？

イギリスというと「食べ物が美味しくないでしょう」とか「天気が悪いでしょう」と言われることが多いのですが、実際生活してみると、家族で経営しているようなローカルのパブやカフェ、レストランは美味しかったですし、10数年前に一度来たときに比べれば、ロンドンはとても美味しいものにあふれていました。天気も「一日の中に四季がある」と言われるほど変わりやすいのですが、「光」というものの感じ方が変わりました。

そして、なにより驚いたのは「不便さは人と人を結ぶ」ということでした。電車が時間通りに来なかったり、到着するホームが突然変わったり。そんな中でみんな笑いながら「もう、しょうがないわねぇ」と見知らぬ人同士がおしゃべりをします。不便さに苛立つのではなくて、人と人が微笑みあって、あきらめていく。そのありようは、心地よいものでした。Amazonの荷物も"Before 9 pm"と書かれていて「一日中待つやん！」と思うのですが、再配達がないので、受け取れない時には近所の人が預かってくれたりとか。ちなみに、都会にはAmazonロッカーが駅などそこかしこにあります。

団体代表と学生の両立って大変？

研究の内容はぜひ次号にとっておきたいので、今回は、最後に団体の代表と学生の両立について書きたいと思います。陽子さんが講演デビューを果たし、全国に駆け回ってくれるのを除ながら、ビデオ通話を活用して「練習」の時間をとってフィードバックしたり、事務局の香里さんと陽子さんと3人で月に一度「振り返りミーティング」という時間をもって、各事業、コミュニケーションについても振り返っていたりしました。文明の利器の恩恵に預かりながら仕事をしつつ、本業である「学生」の生活を異国の地で行うのはなかなかハードでした。自分の英語のできなさ加減に涙した日もあります。でも次第に友人ができ"A cup of tea"を共にすることで落ち込んだ心に栄養をもらっていました。

ミレニアム・ブリッジからの４月の定点観測

国際フェローシップとは？
日本財団の奨学金事業の一つで、国際的な識見をもって、自らの専門分野で新たなイニシアティブを主導し、社会課題の解決に貢献できる人材を育成することを目指して、2012年度からの6年間で、計6期、45名のフェローが誕生しました。

リヴオンを応援する４つの方法

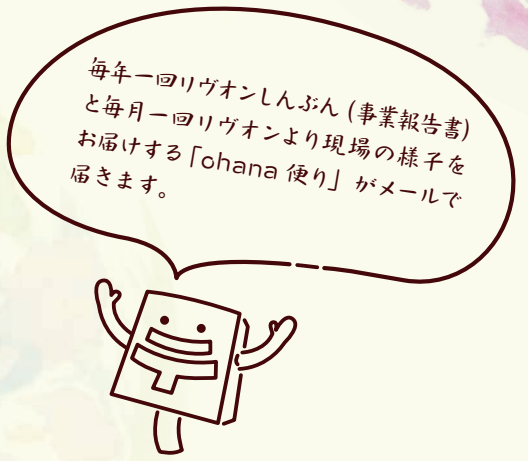
01

継続寄付会員の ohana メンバーになる

＼入会方法はこちら／

1. リヴオン WEB サイトの寄付ページにアクセス
2. 毎月振り込む金額を選択し、必要情報を記入し決済完了
3. クレジットカードの自動引落しにより毎月寄付が開始

リヴオン 寄付 で検索



ohana メンバーとは？

“ohana” とは「家族」（ハワイ語）の意でお互いに助けることを厭わない、血縁も越えたつながりを表しています。ohana メンバーの毎月のサポートによって、身近な家族や大事な人を失った人たちを支える、ちょっと遠くから見守る家族のようなつながりを願ってこの仕組みをつくりました。寄付の使途としては、若者遺児たちのための「つどいば」の継続的な開催や、「いのちの学校」のような、死別を経験した人が経済的に気兼ねなく参加できる学びの場の開催に使わせていただきます。

02 花募金で支援
- 単発での寄付 -

みなさまからいただきましたご浄財は、リヴオンが大切な人をなくされた方々を支える活動として行っている＜情報提供＞＜書籍制作＞＜学びやケアの場づくり＞に使わせていただきます。ちょっとしたお気持ちであったとしても、届けていただければ、私たちがその気持ちを必ずグリーフサポートへと結んでいきます。支払い方法はお振込または、クレジット決済でのご寄付になります。

花募金 申込み先
http://bit.ly/2GJwf41

03 リヴオン駆けつけ隊
- 単発ボランティア -

「リヴオンの活動をぜひ応援したいから、何か頼みたいことがあればいつでも連絡してね。」そんなお声をいただくことが度々ある中で生まれました「リヴオン駆けつけ隊」。ご登録いただいたメールアドレスに、単発（1 日〜数日）のボランティア募集のご連絡をさせていただきます。

＜例えば…＞リヴオンしんぶんの発送・アンケート入力・イベントボランティアスタッフ等。

駆けつけ隊 申込み先
http://bit.ly/2logWeh

04 書籍の購入と配布
- グリーフケアの情報提供 -

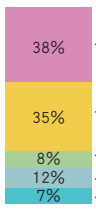
「自分で自分をケアしていく力を育めるような１冊であるように」という願いを込めて、東北での震災百ヶ日に合わせて制作したグリーフケア冊子『大切な人を亡くしたあなたへ』。本を購入してご遺族にお渡しすることを通じて、死別を経験した人とリヴオンを応援することができます。

書籍購入 申込み先
http://bit.ly/2logWeh

会計報告

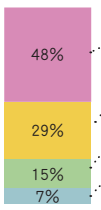
経常収入　9,008,167 円

講演・研修事業	3,458,790 円
寄付金	3,124,195 円
出版事業収入	713,149 円
補助金・助成金	1,093,000 円
その他	619,033 円



経常費用　8,832,935 円

グリーフサポート事業	4,292,356 円
遺児支援事業	2,559,441 円
管理費	1,358,751 円
自殺予防事業	622,387 円
その他	0 円



第 6 期 2016 年 10 月 1 日より 2017 年 9 月 30 日までの決算業務を税理士・本間康弘氏（H&T アカウンティングファーム）に依頼し、長谷川ロアン監事に監査、承認をいただきました。おかげさまで、寄付額が前年度比で２倍以上となり、事業を継続、拡大することができました。心より感謝申しあげます。

昨年度の寄付者の皆様、ありがとうございました（※あいうえお順です。恐れ入りますが敬称略しております）

泉 恵子 / 伊藤 真尚 / いのちの学校東京有志 / いのちの学校名古屋有志 / 岩元 暁子 / 上田 敦子 / 内平 淳一 / 遠藤 賢順 / 大河内 大博 / 大谷 美穂 / 尾角 光美 / 岡田 深海 / 岡村 充泰 / 沖 みちる / 小野 光江 / 笠原 裕子 / 加藤 宥教 / 川島 陽子 / 木原 祐健 / 工藤 聡 / 熊森 克己 / 小海 崇史 / 小沼 千恵 / 酒井 義一 / 佐藤 麻衣 / 佐脇 亜依 / さわの めぐみ / 真宗大谷派東京講演会 参加者 / 鈴木 岳成 / 髙山 信雄 / 竹中 光史 / 津髙 絵美 / 利根 沙和 / 丹羽 正敏 / 野田 芳樹 / 萩原 輝浩 / 橋本 琴音 / 濱崎 祐一 / 半田 康子 / 廣岡 睦 / 藤田 藍 / 藤元 雅文 / 舟之川 聖子 / 古田口 呂子 / 細川 朋美 / 三島 秀典 / 水口 陽子 / 三井 悠 / 三宅 教道 / 千空 / 山本 佳代子 / 吉水 岳彦 / 渡邊 真規

リヴオン最新情報が届くメルマガ

リヴオン便り

http://bit.ly/2logWeh

リヴオンの活動やグリーフケアの情報をご希望される方、ぜひお便りのお申込みお待ちしております。毎月一回、代表の尾角からのお手紙からはじまり、直近の催しなど最新情報が届きます。

あとがき

リヴオン理事
水口陽子（みずぐちようこ）

今回のリヴオンしんぶんはいかがでしたでしょうか？「実の巻」でいのちが一巡りして「次号で何を伝えたい？届けたい？」と編集部一同で探っていきました。「植物の成長には太陽の光が必要だよね」ということと、奇しくも「光美」「陽子」という名前とが響きあい、この「太陽の巻」が出来上がりました。この１年間がどんな年だったのかイメージとして伝え、それを見事なイラストで表現してくださったイラストレーターの伊藤道郎さん。いつもリヴオンの大切にしているあたたかさを今回のリニューアルにあたっても、デザインとして落とし込んでくれたデザイナーの坂上彰啓さんに心より感謝申し上げます。活動のご報告を目的としているものではありますが、手にとったときに、あったかい気持ちや、うれしい気持ち、やさしい気持ちになれる…そんな存在として届けられたら幸いです。

発行：一般社団法人リヴオン 〒116-0002 東京都荒川区荒川 4-25-8-603　TEL・FAX:03-6806-7180 / E-mail:info@live-on.me / Web:http:www.live-on.me